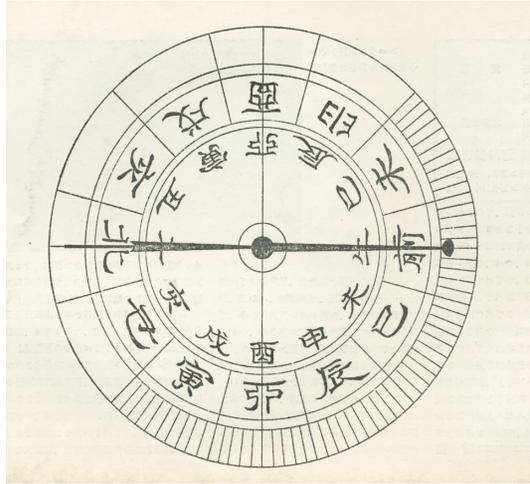


無意味な意味の

尾形亀之助読書会通信

第七号



「北日本詩人」大正15年4月号の表紙絵・尾形亀之助

「無意味な意味の尾形亀之助読書会通信」第七号をお届けします。この通信の発行は、前号が昨年七月の発行でしたので、約半年ぶりとなります。おかげさまで、読書会の隔月開催は今のところ、ずれる月もありますが、守られております。勝手な会ですが、皆様のおかげで続いているものと強く思っております。皆様にご感謝申し上げます。

今号は、大分前になってしましますが、二〇一三年一月十九日に開催した「第七回無意味な意味の尾形亀之助読書会」にゲストでお招きしたイラストレーター村上かつみ様の「言葉から触発されて絵が生まれるまでの葛藤と喜び」と題した講話を掲載させていただきます。

村上かつみ様は、講話の中でお話しされていますが、二〇〇九年に尾形亀之助の詩にインスピレーション

ンを得てイラスト作品を作られて、仙台の丸善で個展『亀之助の詩に黄色い雨が降り注ぐ』を開催された方です。講話の表題の言葉のとおり、尾形亀之助の詩に魅力を感じ、その得体の知れない感覚を言葉でなく、絵で表現されました。その表現行為を、再度、言葉で説明していただいたということですね。

文字起こしをした文章を読んで、大変面倒なことを村上様に強いてしまったのだなということも、今更ながら痛切に感じております。絵を描いた方に、どうしてこういう絵になったのか、他人の目の前で説明せよという、ある種拷問のような会でした。それにも関わらず、快く応じてくださいました。改めて、村上様にはお詫びと、御礼を申し上げます。さらに、その上、こういう企業秘密と言うべき、創作活動の極意を通信誌に公表することを承諾いただきましたこと、重ねて御礼と感謝を申し上げます。

ここに掲載しております講話録は、村上様に一度だけ、文字起こしをした生の文章に目を通していただきました。その後は、文章として読みづらい箇所を小熊が修正して、校正を施し、講話録に仕上げさせていただきました。それ故、文章の不正確さや誤り等がありましたら、それは小熊の確認作業の誤りということになります。また、村上様が伝えたかったニュアンスと若干違う表現がある可能性があります。そのことを御承知の上、大変失礼になりますが、大雑把な講話録ということでお読みいただければと思います。

前置きの最後として、村上様が作られたそれぞれの絵の説明のお話が講話の内容ですので、本来なら村上様の作品を掲載するのがお読みになられる方には親切かと思えます。しかし、まず小熊の判断でそれは行いませんでした。もちろん著作権の問題や誌面が小さいこと、そして印刷しても満足できる画像を掲載できないこともありますが、尾形亀之助の詩（村上様の作品の表題でもありません）を最初に掲げること、村上様が詩から得られたインスピレーションを、お読みになられる方のご自分のインスピレーションと比較して読み進めていただくのも一興かなと思ひ、そうさせて

いただきました。御理解ください。また、講話の進行は、二〇一〇年に村上様が私家版として出版されたイラスト集『尾形亀之助詩集より「黄色い雨が降りそぐ」』に掲載された作品の順番に拠っています。

第七回無意味な意味の

尾形亀之助読書会講話録

二〇一三年一月一九日

於：大河原町駅前コミュニティセンター

「多目的ホール2」

村上かつみ

『言葉から触発されて絵が生まれるまで

の葛藤と喜び』

村上…はじめまして、村上です。よろしくお願ひします（拍手）

こういうことは初めてなので、どういうふうに行進したらいいのか、ちよつと分からないのですが、思ったままの話をさせていただきます。

それで、簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は出版の仕事をやっております、本の表紙や挿絵のイラストレーションをやっております。今月も間もなくですが、また新しい本が文藝春秋から出ます。海堂さんという若い、ユーモアミステリーを書かれています方の作品の表紙を描かせていただきました。今月発売になるのかな、まだはつきりしていませんが、例えば、そんな仕事をさせていたただいております。

あと、仙台の駅前のデザイン学校「日本デザイナー芸術学院」で校長を兼ねながら、イラストレーションを指導しております。ですからいま、学生に助けてもらいながら、なんとか元気でやっておりますのかたと

思います。

それで、小熊さんのほうから今日こういう話を頂きました。本来は絵を描く人はあまり説明をしないと、思います。なんだろう、内輪話とか、裏話とか、別に秘密ではないですけど、この絵はどうやって描いたのか、あまり問われることはないです。ただ、僕は、美術系の団体に入っており、会員同士ですけど、ちよつと批評会みたいなことをやる形があります。その時に多くの人に質問されることがあり、それにちよつと答える程度はあります。今回は、このように「お前は何故こういう絵を描いたか」といことを、小熊さんから喋れという話が来たわけです。初めての経験ですし、どこまで話せるのか言葉にならない部分がいっぱいあるので、その辺だけご了承いただきたいと思えます。

まず、何故、尾形亀之助の作品を僕がやろうとしたかということについて説明しないといけないかなと思います。僕は二〇〇〇年に仙台に戻ってきました。高校を卒業して、東京の学校に行つて、ずっと東京に居て、あつちで生活しておりました。しかし、最後は地元に戻つて活動したいなと思つておりました。それで仙台に戻ってきました。また同時に地元の作家と組んだ仕事をやりたいなと思ひ、いろいろ探しました。ほんとうに恥ずかしいのですけれど、その時に尾形亀之助さんという方を初めて知りました。五十を過ぎてから初めて知りました。それまで僕は尾形亀之助を知りませんでした。さらに尾形亀之助は宮城県の方で、ましてや僕は東北学院を卒業しており、同じ学校に関わつた作家でもあるということ、全然知りませんでした。それではちよつと読んでみようか、ということ、亀之助さんを読んでみました。

そうしたら、思潮社で出されている現代詩文庫の『尾形亀之助詩集』のあとがきと、以前に仙台市文学館で企画した尾形亀之助展の冊子に、私が長年大好きで追いかけてきた別役実さんが文章を書かれておりました。「えーっ」と、僕の大好きな先生が、こういうこ

とをやっているのだと驚きました。それで本気で読もうと思ひました。

読んでみると、なんて言葉から絵がイメージされる世界なのだろうと感じました。ちよつとこれはしんどい作業になるなと思ひましたけれども、やってみようと決意しました。それで大分読み込んで、なんとかこれは絵にできそうだなと思ひました。その時に、丸善さんと僕が、今度四回目になるのですけれども、何年か一回、個展をやつておりました、じゃあ、亀之助でやりますということ、二年の時間を頂きまして展覧会を行いました。

僕は締め切りを決めないと、なまけものなので作品を作らないタイプでして、まずケツを決めます。そうしないと持続できない体質なので、二年間でやろうということ、これを始めました。

展覧会をやつた時に、そこで武田こうじさんとも知り合うことができました。武田さんには、仙台市民文化事業団のほうの仕事で、私の個展を取材していただき、暖かい文章を頂戴しました。それが先ほど紹介していたいた去年の『ふたりの雨展』（注二〇一二年十月、オンワード・スクエア・ギャラリー）にも結びつきます。そういう、諸々のいきさつで個展をやりました。それで、これはもつたないなということ、じゃあ本にしようかということになりました。これは完全に自費出版なので全然商売にはならないのですが、これを本にしました。

それを小熊さんがどちらかで見られて、このお話が来ました。この本はいくつかの書店に置いていた程度で、あとは個人のつながりで販売しました。ですから、現在も販売はしております、あまり知つていない人はいないかなと思ひます。

前置きはこれくらいにして、絵について、言葉ですが、それについて喋れということなのですが、先ほど出版の仕事をやつておられるということをお話ししました。つまり、いつも文章を読んで、一枚の表紙となるイラストレーションを創作しているわけです。ゲラ刷

りでいうとこんな厚い原稿を頂いて、これを読んで一枚の絵にします。文章を読んで表紙を描くという仕事です。あと挿絵も当然そうです。そして、つまらないハウツーものも、読まない一枚の表紙にならないという仕事上の習慣があります。文字と絵の組み合わせはイラストレーションの一つの形ですが、普通のイラストレーターよりは慣れております。慣れているという表現よりは、非常に体験していると云えます。亀之助さんの詩を読んで、絵にならない作品もありました。私の力では、この詩は絵として表現できないなという、非常に難しいものもありました。そのため、本の全体の構成は各詩集からバラバラに詩を選んで一冊の本になっております。ここにいる方は亀之助さんの世界には詳しい方ばかりだと思ひますが、本のつくりは、全然順序だつてませんので、並んでいる絵はバラバラな詩集から入つてきています。その辺は心置きください。

『雨降り』（詩集『色ガラスの街』より）

地平線をたどつて
一列の楽隊が ぐずぐず してゐた

そのために

三日もつづいて雨降りだ

私は、この絵が大好きです。個展のポストカードの絵はこれにしてあります。ポスターの絵もこれを使つております。絵として個人的に好きだということ、この絵には電信柱がありますが、「電信柱」という言葉は、詩にはありません。実は、ここには別役実さんが出てきております。別役実さんの芝居を見た方は分かると思ひますが、ベンチ、電柱、傘の付いてい

る電柱、電燈：ですか、それが非常に象徴的に登場する先生のイメージの世界があります。舞台装置として電信柱がボンと置いてあります。それは、亀之助さんが生きていたのが、大正から昭和の十七年までですか。昭和の初めの頃。大正の後半。そのイメージを僕は電信柱というものに共有しております。

ここで「雨」ってなんだろうなということをお話しなければいけないと思います。亀之助さんの作品を読んで、僕は、本のタイトルに、「黄色い雨が降る」と添えたのですが、亀之助さんの詩を読んで思ったことが、視覚的に言う、「黄色」、「雨」というイメージです。そういうことで、表紙も黄色くしております。そういう理由で「雨」ということです。なんとまあ、雨という言葉が出てくる世界なのだろうか、という想いがあります。だから、自分が思うキーワードというのが、「黄色」と「雨」ということから始まりました。それで、この「雨降り」の中の雨も黄色ということですよ。

ちょっと難しいのですが、この文章からどうしてあの絵が出たのですか、と尋ねられると…。僕は、あの楽隊は自分の小さい頃のイメージで、サーカスに近い、大道芸人に近いような世界観がちょっとありました。それがいろんな人々が住む、いろんな町を練り歩いて、喜びを与えたり、悲しみを掬ってあげたりする。ここにも別役実さんの童話の世界があります。そういうことをずっと長年やっているの、そういうイメージがちょっとあります。この文章の楽隊は悲しい人も、苦しい人も含めて、救ってあげて歩いている人たちかなと、勝手に僕は思っています。この楽隊はそういう人たちに出会うために、歩いている。それで想いの深い黄色い雨の中を歩いている画面かなと思っております。あと、時代としてはそういう時代です。もつとイメージはあるのですが言葉にすると…まあ、こういう絵になりました。

小熊…あの、「ぐずぐず」というのは…

村上…ああ、それはあんまり感じなかったですね。

小熊…ああ、そうですね。

村上…ですから、出逢いに行く、っていうイメージのほうが強かったの。

小熊…ああ。

村上…それは当然ゆっくりして、行ったり、戻ったりするっていう。

小熊…ああ、そうですね。

村上…あの楽隊ってそうじゃないですか、チンドン屋さんにしたって。

小熊…そうですね。

村上…すつと目的に行くんじゃなくて、下がったり、みんなと関わって進んで行くっていうね。

『無題詩』（詩集『色ガラスの街』より）

から壇の中は

曇天のやうな陽気でいつぱいだ

ま昼の原を掘る男のあくびだ

昔――

空びんの中に祭りがあつたのだ

これも早めに作った作品です。どうしても本を構成する時、好きな絵を最初に置きたくなります。空びんというのは、酒の瓶と僕はもう決めているわけです。亀之助さんが酒造りをしていた商家に生まれた人だったということとは、別に関係はないですが、お酒の瓶というのは空びんというイメージがありまして、そこにお祭りがあるということですよ。

この文章からは、「空びん」と「お祭り」というイメージがきました。それと、「少年」です。本当は、

大人なのかもしれません。けれど、僕はこの文章から、空瓶、少年、祭り、というものが、絵としてのイメージとしてきました。ちょっと土の中に入った空瓶ですが、少年がお祭りからお面をつけて帰ってくるという絵です。そこで顔だけがちょっと覗いています。なんかありますでしょうか？ここになんで提灯があるので？だとかそういう質問されると、全然答えられないです（笑）。

小熊…出刃包丁を持っています（笑）

村上…だから何で包丁かと。何でこのへんのイメージが（どうか）と尋ねられると、辛い心理が結構あります。イラストレーションでよくやる手法というのが、物にイメージを持たせて、ちょっと転がしたりするということがあります。だからそれが、どうして？と尋ねられると困っちゃうのです。

小熊…この亀之助の詩のことでよくいわれるのが、この詩の「空瓶の中に祭りがあつた」という表現は、家業が造り酒屋だったということで、まだ酒造りを廃業しなかった幼少の頃の思い出みたいなのを詩に書いているのではないか、というふうに読む方もいますけど、村上さんその点ではどう感じましたか。

村上…ああ、うん。

小熊…それと、大河原と結びつけようという人もいますけど、あんまり私は結びつかないと思うんですけど。

村上…空瓶のイメージは僕もありましたね。それも少年のころの思いが詰め込まれた瓶なのだろうなと。

女性…なぜ蓋が閉まっている感じなのですか？

村上…やっぱり、こう、あー（笑）

女性…あえて、というイメージはまったくなかったですね。時間を閉じ込めたようなイメージ…タイムカプセルのようなイメージですか？

村上…開けるイメージはまったくなかったですね。
想いを閉じ込めた…

『音のしない昼の風景』（詩集『色ガラスの街』より）

工場の煙突と それから
もう一本遠くの方に煙突を見つけ
そこまで引いていつた線は

唾が 街で
唾の友達に逢つたような

これは、コラージュ風に画面に集めるという、イメージを集合させるやり方をしておりまう。
この詩を読んで僕は、時間を感じました。時間が消えたという。それで、時計の針が飛んでいる絵になっておられます。時間が静止したというか、消えたという感じですね。それで、一番の主人公が時計だということにしておられます。時計は、懐中時計にしました。これはいろんなものがきつとある絵ではないかと思うのですが。

小熊…私がすごく、松本俊介の絵に似ているなと思つたのですが、松本俊介は時計とか描かないですけど、工場とか、煙突とかをよく描いていますし。

村上…ああ、はい。
小熊…あと亀之助の詩と松本俊介の絵に共通点があると言った人もいます。松本俊介は音を聴くことができなかったということも、なにか通じるものがあるのかもしれない。

村上…ええ。
小熊…何となく、ですけど。

村上…亀之助さんの、一つひとつの詩は、短い詩なのですが、イメージを掘り起こすには時間がかかります。それで、やはり、大体、一つか二つのイメージが浮かんできます。

絵にする時に浮かんでくるというのが、この時は、なんか知らず時計のイメージでした。時間を失つた時計というイメージがありました。なんというか、唾というか、そういう表現も影響しているのかもしれない。喋れないということ。これはあまり、会場でも反応が薄かった作品です。分かってもらえなかったのかもしれないですけども、当然、売れないです。売れ残つたわけです。

武田…反応というのは、感想を言われるものですか。

村上…言う人もいます。

男…どういふ感想が多いですか？

村上…やっぱり褒めてくれる感想が多いです。けなす人はあまりいませんよ（笑）。

武田…詩のとおりだ、みたいな。

村上…ああ、そうじゃないです。

武田…やっぱり絵の感想…

村上…そうですね。詩は言わないですね。

武田…うーん。

村上…展覧会では、亀之助さんの詩をプリントしたやつを、絵の下につけました。そうしたら、詩の方が好きな人は詩を、絵の好きな人は、絵だけを見ていたりということがありました。いろんなタイプの人がいるのですけれど、絵と詩を厳密に比べる人たちもいます。なんでこんな詩から、こんな絵なの、おかしいよねという。そのへんはきつと見る人が気になるのでしょうか。そういう意味でこれは、時計が詩にはありません。僕たちはここが本当は勝負なのです。言葉にない部分が表現できないと、こういう作業はだめだと思つているのです。そう考えると、私もちよつと、いまひとつかなと。

『雨が降る』（詩集『雨になる朝』より）

夜の雨は音をたて、降つてゐる

外は暗いだらう

窓を開けても雨は止むまい

部屋の中は内から窓を閉ざしてゐる

これも非常に難解な作品の一つです。僕はこの詩は、家の中にも雨が降っているイメージでした。ですから、心の雨ですか。自然現象としては外の雨ですけども、部屋の中も雨が降っているイメージです。孤独感があります。一人、そこでちよつと晩酌している。おちよこも一本、お銚子一本という、そこで一人というか。いま「孤独」という言葉を使っています。これは完全に部屋の中は雨だと思いましたが、完全に閉じ込められた空間を感じました。それで独りじつと座っている男の上に、部屋の中で雨が降り注いでいるというイメージを持ってきて、このような絵になりました。これはちよつとイラストの白い部分、これは切り絵なのです。最初に言い忘れましたけど、紙を切つて、家の中の部分を、白い紙を、普通黒い紙を切るんですけど、白い紙を切つて、ちよつと違つた空間にしようということをやりました。黒い紙ではなくて、白い紙を切つて、傘と小さなお盆のところなので、白い紙を切つてやっております。ですからこれは完全に部屋の中は雨だというイメージです。

『原の端の路』（詩集『雨になる朝』より）

夕陽がさして
空が低く降りてゐた

枯草の原つばに子供の群がゐた
見てゐると——
その中に一人鬼がゐる

これは、こういう絵です（絵を見せる）花の切り絵です。

これも紙を切つて、普通こういう黒い部分を切つて、色を裏からはめていくのですけど。上のこういう部分はやらないで、あの、貼り紙ですか、紙をこういうふうに切つたやつを貼つておきます。貼り絵と、切り絵と、ふたつ併用しております。

これは私自身も含めて、子供の頃の夕暮れみたいなイメージです。よく見ると鉛筆を持っていたりしているのですが、それは私自身の小さい頃のイメージです。

この絵で一番好まれているのは、鬼の表現です。鬼というのはどういうものだろう、ほんとうはこういうものじゃないような気がしているのですが、鬼って何だろうなという。何かこう、ちよつと、今ひとつできなかつたかな。どうでしょうかみなさん、鬼ってなんでしょうか？

その中に一人鬼がいる

という。

そこが本当に悩んだところです。

よろしいですか、何か、このままいっていいですか（笑）。

『幼年』（『銅鑼』九号 大正十五年十二月発行より）

夜あけに床の中でハモニカを吹きだした
子よ

可愛いさうにそんなに夜がながかつたか
ブーブー ハモニカを吹くがよい

お前のお菓子のやうな一日がもうそこまで来て
ゐるのだ

さつき絵は売れましたかという質問がありましたけれど、ある子供さんの関係でお仕事をされている方が絵を買われて、子供さんが集まる部屋にいっぱい飾つておられます。なんていうのでしょうか、僕は、子供が描かれていれば、なんでも良いのかという感じがしています。さつきのやつもそうだし、次のやつも、こういうのを買って行きます。ちよつと、意味が違うなあと（笑）思っています。

それで、これは子供の、「そんなに夜が長かつたか」という、この想いをどうにかして絵にできないかと考えて作りました。この子がどう思つて、何で夜はこんなに長いのだろうなと、それが一番に絵にしたいなと思つた部分です。

小熊.. 亀之助の詩を北川冬彦が「童心がある」って批評しています。亀之助はそれを凄く怒りました。「人をバカにしている」と。でも私は、亀

之助の詩には童心があると思つていいのですけど。

村上.. 僕はね、決して感じなかつたですね。

小熊.. ああ、そうですね。

村上.. 表現としてそういうのはありますけれど、それを表現しているとは思えなかつたです。

小熊.. やっぱり虚無の詩人とか呼ばれている虚無みたいなもの…

村上.. ええ。

小熊.. そっちのほうの感じ。

村上.. ええ、重いですね、言葉でいうと、僕は雨、梅雨の雨というイメージなのです。重い雨、シャワーではなく、なんだろう、じとじとと、梅雨時の一番嫌な、また雨かよー、っていう、あの雨のイメージです。

小熊.. ええ。

村上.. そこに、どんなに想いが積み重なっているのだろうな、ということ。だから、それを切り絵で表現することに限界があります。

これで子供の長い夜について僕がやったのは、枕が飛んでいるということ。象徴的に、寝付けない想い、それが浮遊した枕という、ここではそう表現をしてみました。

『十一月の街』（詩集『雨になる朝』より）

街が低くくぼんで夕陽が溜つてゐる

遠く西方に黒い富士山がある

これはですね、実は、私の、富士山を見ている風景を絵にしております。そこは、私が住んでいたところ。そこが、ちよつと富士山が見える場所でした。遠くのほうから見えました。世田谷の富士見橋というのがありまして。今は建物があつてなかなか見えないのですけれど、ちよつと前は見えました。その風景とこの詩がだぶりました。ですから意味というよりもこれを読んだ瞬間に浮かんだ、富士見橋からの黒い富士です。じゃあ、そのままやってみようと、思い浮かんだものを素直に絵にしたということです。ちよつと街があるのですけども、これもコラージュ風になっていきます。夕陽がさした街と、黒い富士と。

女性… 亀之助も世田谷に住んでいましたよね、

と。それで百合がちぎれてちよつと飛んで行ったところなので、仕事を貫つて関わりました。だから多分、その辺で村上さんの展覧会のレビューを書くオファーがきたと思います。詩を書く人間には、詩を読むというか、亀之助を理解しようという気持ちが強いのと思います。けれど、村上さんは詩を「見ている」という印象が強いです。もちろん読んではいませんが、絵として見ているなということが凄く新鮮で、驚きました。だから、さっきの全部入れてみようという感覚が、詩と絵でどっちも関係を補完しあっている面白さがあります。僕とかは詩を書く立場だからなのかもしれないですけど、自分の言葉にしてしまうくらいの気持ちで亀之助の詩を読まなければいけないと思っちゃいます。だから難しく考えているのかなあと、うふうふに思います。村上さんの話がすごくおもしろいです。だけど、きつと今日はアウエーだから(笑)。

女性… 世田谷の、どこ？

武田… 僕は仙台市文学館で尾形亀之助展をやっているときに、仕事を貫つて関わりました。だから多分、その辺で村上さんの展覧会のレビューを書くオファーがきたと思います。詩を書く人間には、詩を読むというか、亀之助を理解しようという気持ちが強いのと思います。けれど、村上さんは詩を「見ている」という印象が強いです。もちろん読んではいませんが、絵として見ているなということが凄く新鮮で、驚きました。だから、さっきの全部入れてみようという感覚が、詩と絵でどっちも関係を補完しあっている面白さがあります。僕とかは詩を書く立場だからなのかもしれないんですけど、自分の言葉にしてしまうくらいの気持ちで亀之助の詩を読まなければいけないと思っちゃいます。だから難しく考えているのかなあと、うふうふに思います。村上さんの話がすごくおもしろいです。だけど、きつと今日はアウエーだから(笑)。

村上… へえ。

武田… 「詩を見ている」という感覚があるようにみなさん思いませんか？ 捉え方の違いとか。ストリートに詩として入ってくるから、分からないから、余計に頭の中でイメージしてしまいますね。

女性… まる一日、あの、亀之助が住んでいたところとかを歩いてきました。

武田… うん、そうですね。自分に置き換えてイメージしてしまおう。

村上… ええ。

女性… 松本俊介が住んでいたところとか、見てきました。今と同じ風景だったかもしれないですね。

村上… 全然そこ、考えてなかったです(笑)。

女性… 読んでしまつてそのまんま、情景なり見える詩つてつまらない。こういうふうにはならないと

『雨日』(詩集『雨になる朝』より)

午後になると毎日のやうに雨が降る

今日の昼もずいぶんながかつた

なんといふこともなく泣きたくさへなつてゐた

夕暮

雨の降る中にいくつも花火があがる

これは私が、この詩から絵と結びついたつていうのが、

今日の昼もずいぶんながかつた

どんな一日だったのだろうなということ、泣きたくさへなるという想いが、どうなのだろうなということ。花火は一応描いてはいるのですが、百合の花がちぎれたところで、この日の起きたことを表しています。何かが消えた、何かが壊れた一日だったのかな

『小石川の風景詩』(詩集『色ガラスの街』より)

空

電柱と
尖つた屋根と

灰色の家

路

新らしいむぎわら帽子と
石の上に座る乞食

たそがれどきの

赤い火事

これは、本当に文字を、ほんほんぽんぽんと貼つた。言葉にあるものをモチーフとして、全部、画面に載せてみようかと考えて作りました。ここには言葉にないものも入っています。それもひっくり返るめて全部入れて一枚の絵にしました。どういう街なのだろうな。言葉にあるものが全部、空、電柱、尖つた屋根、灰色の家、道、麦わら帽子、石の上に座る乞食、赤い火事と。火事は僕、夕焼けにしました。

なんかこうやって説明すると面白くなくなりますね(笑)。

武田… 僕は仙台市文学館で尾形亀之助展をやっているときに、仕事を貫つて関わりました。だから多分、その辺で村上さんの展覧会のレビューを書くオファーがきたと思います。詩を書く人間には、詩を読むというか、亀之助を理解しようという気持ちが強いのと思います。けれど、村上さんは詩を「見ている」という印象が強いです。もちろん読んではいませんが、絵として見ているなということが凄く新鮮で、驚きました。だから、さっきの全部入れてみようという感覚が、詩と絵でどっちも関係を補完しあっている面白さがあります。僕とかは詩を書く立場だからなのかもしれないんですけど、自分の言葉にしてしまうくらいの気持ちで亀之助の詩を読まなければいけないと思っちゃいます。だから難しく考えているのかなあと、うふうふに思います。村上さんの話がすごくおもしろいです。だけど、きつと今日はアウエーだから(笑)。

武田… 「詩を見ている」という感覚があるようにみなさん思いませんか？ 捉え方の違いとか。ストリートに詩として入ってくるから、分からないから、余計に頭の中でイメージしてしまいますね。

武田… うん、そうですね。自分に置き換えてイメージしてしまおう。

女性… 読んでしまつてそのまんま、情景なり見える詩つてつまらない。こういうふうにはならないと

思うのです。

武田…そうですね、きつと。でも、おもしろいなあ。

村上…ということだ(笑)。

『月が落ちていく』(詩集『色ガラスの街』より)

赤や青やの灯のともつた

低い街の暗らがりなかに

倒しまになつたまま落ちてしまひそうになつて

ゐる三日月は

いそいでゆけば拾ひそうだ

三日月の落ちる近くを私の愛人が歩いてゐる

でも きつと三日月の落ちかかつてゐるのに気が

がついてゐないから

私が月を見てゐるのを知らずにゐます

これは、衣装考証でちよつと昭和の初めごろを意識させています。ここで一番絵にする時に気にしたのは、三日月が落ちかかつてゐるのに気がつかないという部分です。ここは絵にしたいなと思ひました。三日月が落ちかかる…。非常に難しいですね。僕からすると、どういふことなのだろうと思ひました。

僕はやつぱり、武田さんも言つてくれたけど、どうしても絵として考えるので、三日月が落ちかかるのに気がついていないということは、どんな状態なのだろうなつて思つてしまいます。きつと言葉ではあり得るのでしょうか。

小熊…この時ぱつと、絵の構成は頭の中に浮かびましたか。

村上…そういう時もありますし、もう何枚もこうした

絵を描く時もあります。

小熊…じゃあ、じっくりくるまで。

村上…ええ。

小熊…これはかなり(何枚も描かれた?)。

村上…これは、男の表現をどうしようかとえらく悩みました。どういふ関係なのだろうなということ

を含めて。

女性…三日月が落ちかかるというのは、有明の月というイメージは無いのですか?

村上…ああ。

女性…朝の。

村上…違いますね。僕は夜でしたね。

女性…夜ですか。

村上…完全に。

武田…そこが、なんか男性と女性の違い(笑)

女性…私はこつちはね、有明の月っていう感覚です。

だから愛人が歩いて行つていう。この愛人が

出てくるのも、やつぱり有明の月なのよ(笑)

武田…これもほら、愛人という言葉がいいですよ。これ、男性と女性、大分捉え方が違うのではな

いかと思つたのですが。

女性…歩いてく、というのだから、朝方っていうイメージではないかと思ひます。

村上…そうか…。俺も夜だったな、最初から。

武田…でもちよつと、後ろめたい時間というか、なんかね。

女性…これも本当に、夜、真夜中だったら、こういうのじゃないという感じがします。

武田…やつぱり違うのですね。

村上…最初、あれは赤や青や…、火が灯つて、ついでうのは色か。

女性…私は有明の月だからというのは感じない。

女性…私がある装飾家の絵を見ていた時に、ある男性の人がね、「これって色っぽいよね、お月さんが出ているのですよね。」「そうですね。有明の月ですよ。後ろ向きの女性が描かれてい

る。」と会話しました。そうしたら、「あなた、

わかつてゐる」って言われて(笑)。「これね、

愛人なのね、だからいいのですよ。」と言つて

おられました。だから夜の風景まで、真夜中の

情景まで見えてくるでしょ、つて話になった。

武田…なるほど。

男性…経験豊富で。

女性…違う、違う。絵を見てそういう会話になつた(笑)。

武田…僕は、以前、高校の文芸部でこの詩を取り上げた時、男性と女性で反応まったく違ひました。

男性はこれぞ詩だと言ひます。愛人の描写のところというか。でも女性はやつぱり違ひます

ね。

僕もこういう絵のイメージですけど。

村上…なるほど。

最初に明かりつていうのが入ってくるから。好きな世界ですね。赤い、青い火が。そこで、や

られてしまふんだな。

『八角時計』(詩集『色ガラスの街』より)

私は 交番所

のきたない八角時計の止つてゐるのを見

たことが

ない

もちろん――

私はことさらに交番をのぞくことを好まない

×

八角時計は 何年か以前の記憶かも知れない

これまた、この詩からこんな絵になって、どうしてかって言われてしまいそうなのですが、これは完全に擬人化しているわけです。感じたのは、ここはですね、

八角時計の止まっているのを見たことがない

という部分が、一番入ってきた部分です。それで、そこをどういうふうに、解釈して、絵にしたいかなって。

男性..じゃあ質問いいですか。

村上..はい。

男性..後の斜線、他の絵でも雨として使われている、これもやっぱり雨のイメージ、後ろに雨を降らせたい、という気持ちで描かれたのですか。

村上..はい。

男性..詩の中に、雨は出てこないですよ。

村上..はい。

男性..この詩が好き、この詩を選んだというのはどういうわけで、私の好きな詩でもあるのですが。

村上..ああそうですか。あのさっきも言った、「交番で八角時計が止まっているのを見たことがない。」、なんだろうな。時計が止まっていたということがあります。

時計自体が止まったことがなくて、そのくせものぞくこともない、好まない。何年も前の記憶かもしれないけど、ポーンと突き放したりしています。なんだろうな、何となくいいな、という感じですね。意味はまだはっきり分からないのですけど。

男性..どうして交番だと思いますか？しかも、真ん中でもちろん、好まないといっていて、で最後に、ぼつとバッテンがあって、何年か以前の記憶かもしれないという。

村上..結構迷惑かけていますよね、この人ね。(笑)

いろいろ、子供連れて飲みにいったりすることもある。

女性..交番のお世話になったことはありませんっけ？

男性..酔っぱらって、あるかもしれませぬ。

村上..可能性はありますよね。遅くまで帰って来なかったりとか。権力じゃないのですかね。権力というものに対する彼の嫌悪感みたな。

男性..まっ、おどろおどろに言えばそうだと思うのですよね。あの、擬人化したっていいましたけど、擬人化したってのは、軍人とか、交番のお巡りとかのイメージですよ。

村上..そうですね、まあ傲慢さみたいなものを。すてきな陽気です

『昼ちよつと前です』(詩集『色ガラスの街』より)

すてきな陽気です

×

マツチの箱はからで
五月頃の空気がいつぱいつまつてゐる

このうすつぺらな

昼やすみちよつと前の体操場はひつそりして
きれいに掃除がしてある

これは、かなり今までの絵より抽象的です。

マッチ箱に、空気がいっぱい詰まっているというのが非常にいいなと思いました。そのイメージがどういうものなのだろう。昼休みということは体操場とか、学校なのだろうな。空間としては、そうだろうな。学校の昼休みということとマッチ箱。どんな幼年時代

のイメージなのだろうかということでも考えました。そして、マッチ箱のほうで、晴れやかな空。まあ、空と空が重なっているのですけども、現実の空よりもマッチ箱の空のほうが青々として綺麗で、もつと今よりいい環境状態、そういう思いかな、というのと空をダブらせました。

男性..すいません、この絵の実物の大きさはどのくらいのですか。

村上..B:、A4よりは大きいかな、これよりはちよつと少し大きいですね。B4ぐらいですかね。

男性..紙の質っていうのは、厚い紙ですか。

村上..基本的にはそんなに厚くなくて、羅紗紙なのですけど。部分的にはちよつと厚いのがありますけど、そんなには厚くないです。厚いと、切れないので、普通のデザインカッターっていうか、替え刃用のカッターを使っています。研いで使う、ちゃんとした刃物ならいいのですけど。

『彼の居ない部屋』(詩集『色ガラスの街』より)

部屋には洋服がかかつてゐた

右肩をさげて

ぼたんをはづして

壁によりかかつてゐた

それは

行列の中の一人のやうなさびしさがあつた

そして

壁の中にとけこんでゆきさうな不安が隠れてゐた

私は いつも
彼のかけてある椅子に坐つてお化けにとりま
れた

この文章からは、「壁の中にとけ込んでいきそうな不安」という、その部分を洋服と絡めて、表現しようと思いましたが。モノクロなのですけれども。まあ帽子だけ普通に、こう表現しております。これは現実で、想いがモノクロの部分になっていきます。

『雨雨』（詩集『色ガラスの街』より）

DORADORADO——
T-TATATA-TA
T-TOTOTO-TO
DORADORADO
T-TOTOTO-TO
DORADORADO——
雨は
ガラスの花
雨は
いちんち眼鏡をかけて

これはちょっと大きい絵です。完全に言葉を音の扱いにしました。ですから、文章の繰り返しになっていきます。ちよつとこれは大きい作品です。繰り返しに言葉がなっていますから、言葉自体を、音と、雨の粒と
いうことで表現しようと思いました。

小熊..本の二ページに渡って見開きで掲載されていま
すね。

村上..これは、この会の案内状で使っていたのだが、ものすごい大きい作品です。二メートル以上あります。一メートル半から二メートルの作品です。

小熊..あの星はなにですか？

村上..弾いた水、ですから雨の滴つていうイメージです。思いが跳ねているというイメージです。この詩はいろんなところで大きくしたりしています。

男性..これは切り絵じゃないのですか。

村上..切り絵です。

男性..切り絵ですか。

村上..結構大変なのです。全部切り抜いています。文字もみんな。

男性..版画なのかなあ。

村上..実はこれ、下に色が入っています。全部。

小熊..ああ、ほんとだ。

村上..白く抜いてありますが、色んな色が下には重なっています。

小熊..ああ、そうか。

村上..画面だと見えにくいですけど。

『可笑しな春』（詩集『雨になる朝』より）

たんぼぼが咲いた
あまり遠くないところから楽隊が聞えてくる

二行しかない詩です。非常に短い言葉で一枚の絵を作るのはちよつと苦しい作業でした。一番難度が高いなあと
思つて読みました。仕上がりがいまひとつです

が。

小熊..亀之助はユーモアっていうのが詩には必要だとい
うことをだいたい言っているし、今で言うユー
モアと亀之助が生きた時代のユーモアという言
葉の感覚は違うのかもしれないですけど、遊
び心とか、いたずら心とか、そういう
ものを亀之助は持っていたと思ひますが、そ
ういう部分を感じますか？

村上..深刻な世界にならないですね。だからね、かな
り辛いんですけど、そういう絶望的な深刻さ
に、作るほうはならないのですね、亀之助が
言っていることはかなり、光が見えないみたい
なことを言っているとしても、絵にするとそ
ういう風にはならないですね。

小熊..絵で表現しようとする、ならない？

村上..ならないです。そういうふうな解釈できないで
すね。だから、やたら明るい感じの絵もいま
でもあったと思います。言葉とちよつと違
いますね。

女性..力強いですよ、普通に読むとそんなでもない
気がしますがね。

男性..それはどうしてでしょうか、一番興味深い点で
すね。

村上..さつきも重たいみたいな発言もあったし、一番
初めの「ぐずぐず」もそういう意味でとら
ないで、感じ方が、詩と絵では違う感じがあるのか。
絶望的にはならないですね、いくら読んだ
つね。

小熊..でも深刻だとは思わけてすね。

村上..重いと。

小熊..重いけど描くと、絶望的にならない。

村上..いろんなものを知らなかったし、知つてしま
うと余計ありますけど、彼の人生の系譜なん
か。

男性..インプットされていますもんね。

小熊..完璧にそうですね。

村上..変に、「そっだよな、あいつ、金があるくせに

仕事をしないよな」とか、「結婚しても仕送りしてもらっていたよな」とか、そういうことを何か知らないほうがいいです。でも書いてある文章は、だからこそ、そういう言葉が使えるっていうこともあるのでしょうか。逆に言うと、仕事をしないから、素直に見られたりするわけですね。働くことに汲々としていっているとそういうのが見えなかったりもするし、いいとか悪いとかの世界じゃなくて、彼のそういう世界、ということなのだろうと思っています。だから深刻になったという思いは本当じゃないですね。非常に難しいことは感じますけれども。そうでなければ、こういうふううに三十枚四十枚作れないですね。疲れ切ってます。

小熊..そうですね、量が凄いですよね。

私は本の絵を全部スキャンしただけで、嫌になっちゃいました(笑)。

村上..だから、そんなふうにならなかったのですね。

女性..亀之助との距離っていうのが、例えば亀之助の奥さんだったり、友人だったり、それからおじさんの松良さんとかの映像とかみると、本当にあいつはひどいやつだって、すごい。周りの近い人は散々な目にあっていますね。

村上..はっははそうですね。

女性..だからすごい。良い距離で、見方をしてこういう絵が出来て、あまりに近過ぎる人はものすごくどろどろした思いばかりあるらしく。

村上..ぼろくそに言う人、いますもんね。

女性..村上さんは亀之助の絵についてはどんなふう

思っていますか。

村上..ちよっと何枚かその頃の時代の絵を見ました。村山さんの絵などです。あの辺りの絵は、僕はあんまり好きじゃないです。抽象的な派のはしり、その後面白くなっていくのですけれど。

あの辺はなんか、なんて言うのだろう、ものまねみたいなの部分がありますね。カデインスキーを模写したような。だからそう思うのでしょうか。まだ、新しいものが生まれる前の、モダンイズムが新しく形になるちよっと前で、ヨーロッパの人たちの作品をコピーしている時代だったのですね。だからかなり先端だったと思います。前衛という。

『夜がさみしい』(詩集『雨になる朝』より)

眠れないので夜が更ける

私は電燈をつけたまゝ仰向けになつて寢床に入つてゐる

電車の音が遠くから聞えてくると急に夜が糸のやうに細長くなつて

その端に電車がゆはへついついてゐる

この詩は大好きでした。本当に好きで、これはもう売れ残つてもいいなと思っていましたが、残念ながら売れました。それで、作つたのがこれです。本当にこう、だから亀之助の夜っていうか自分の夜も含めた、夜のひとコマだなんて思つて。

小熊..あの電燈つて人の目みたいですよ。

村上..そうですね。

小熊..あの電燈。

村上..ああ、ちよっと暗いからね。

小熊..なんか全体を、そういう自分をまた違う自分が見ているっていうか。

村上..そんなに夜が辛かった人なのですかね。

小熊..というか、日中も雨戸を閉めて真っ暗なところ

で生活をした人のようですよ。夜が好きだったのではないのでしょうか。良くわからないですけども(笑)。

村上..とにか、この夜が寂しいは私も好きで、なん

ともいいようがないですけど、いいですね。

小熊..このポイントつて、やっぱり夜が糸のように

細長くなってその先に電車が結わえてついでところだと思つたのですが。私は、それはいったい何なのかと思つたのですが。

村上..そこはあんまり感じなかったですね。あんまり分らないですけど。

眠れない夜、夜が更けるっていう、眠れないつて言う。で、タイトルがいいですよ。夜が淋しい、という。個人的に好きな詩でした。

『秋の日は静か』(詩集『色ガラスの街』より)

私は夕方になると自分の顔を感じる

顔のまん中に鼻を感じる

噴水の前のベンチに腰をかけて

私は自分の運命をいろいろ考へた

これも好きなほうです。自分の顔を感じるという表現がすごくいいですね。それでこういう絵です。

小熊..空が丸いというのは自分の運命をいろいろ考えたから空が丸いのですか？

村上..ん？空が丸い？

小熊..ええ、空が丸く描かれている。
村上..ああ、あれはうずまきね。心の想いですね。

『夏』(詩集『色ガラスの街』より)

空のまん中で太陽が焦げた
八月は空のお祭りだ

何んと澄しこんだ風と窓だ
三色葎だ

小熊..いろんな村上さんの表現方法がありますね。時計はシユールっぽい絵だったり、富士山は日本の浮世絵みたいだったり、これだと着物みたいな感じとか。すごい、いろんなイメージとか技法は同じなのでしようけど、表現方法はいろんなものを使っているような気がしました。

村上..全然意識してないのです。

小熊..ああ、してないのですか。

村上..この場合だと言葉がそうさせているのですね。

小熊..この時の言葉っていうのはどの言葉になるのですか。

村上..ここで強烈なのは、太陽でしょう。あと、すみれ、という気がします。それでこういう形に、それを追っかけて行くっていう形にしています。ぜんぜん意識はしてないのですね。こういう形にしようとか、こういうパターンでいこうとか。

武田..深刻にうけとめすぎたら、全部できなかつたってお話ありました。改めて、また、(イラストを)作っている最中に詩を読み返したりして、なんか自分で違っていたのじゃないかなと思ひ返す。絵の印象が変わる。そういう瞬間はないですか？

村上..これを作っている時？

武田..はい。

村上..そういうのは、やり直しているから。

武田..振り返って。

村上..本当に、破ったりしているのもあるし。人には見せないけど(笑)。ゴミ箱に、ここう。

武田..どうしても詩って読み返してしまふものだから、ぜんぜん、印象って変わるじゃないですか。絵にしてみるとどうしても気になる..

女性..これなんかアンバランスですよ、俳優と。

村上..抽象画みたいですよ。

武田..でもなんかこうこれは初めにパツと決まっていた印象がありますけどね。

村上..ああそうですか。

武田..こういう絵に、図が浮かんでいたのじゃないかなって..

村上..いろいろこうスケッチして..

武田..やっぱりそうですか。

村上..これもそんな悩んでないのですよ。なんだろうな、太陽っていう言葉が好きなので、そうすると凄く刺激してくれます。イメージを。

それで、焦げたなんていうと、「ああそうだよな！」って感じで、出てきます。だから半分ちよつと焦げていますが、これはきつと言葉に助けてもらった形で、出たのだろうなと思ひます。それで、空のお祭りって全然意識してないのですね、八月は空のお祭りだってなんていう。

武田..言葉のほうが不自由な感じがしますね。

女性..ああ、そうなの？

武田..うーん。

村上..それに助けてもらったのだろうな。

そうしたらこういうイメージが出ました。ちよつと焦げかかった太陽が、三色すみれの世界に太陽に浮かんでいって、また抜けて行くという。

女性..すぐく、一番絵にしやすいような気もします。

武田..ちよつと視点を変えてタイムマシーンじゃないですけど、亀之助はこういうふうに見たのかもしれないですね。

男性..一番奥に三角形があるのは、どうしてあそこに三角形があるのですか。

村上..これね、もうちよつとね、いろいろと考えました。これは、スマレがどこに行くのだろうと考えました。それですこし、そこをどういう風にしようかと考えました。きつと思ひが突き抜けて行くところ、入り込んで行くところはどういうものだろうかと考えました。ちよつとそれを、窓にした時もありました。でも、あまりみつもないので、窓にするのではなくて、抽象的な表現のほうがいいかなと思ひました。

男性..三角形がありますよね、光が入って。

武田..プリズム..

男性..はい、あれ、みたいな。

村上..そういう..、そっちに持っていたのですけどね。

武田..詩を書く人は絵を書く時、人ができますよね。人が太陽を見ている図になりますよね、きつとね。

『雨の祭日』(詩集『雨になる朝』より)

雨が降ると

街はセメントの匂ひが漂ふ

×

雨は

電車の足をすくはふとする

×

自動車が
雨を咲かせる

街は軒なみに旗を立てゝゐる

これは自動車が雨を咲かせるという文章のところで
す。ここを絵にしたいなと思ってやりました。

『花(仮題)』(『近代風景』一月号 昭和二年一月発行)

電灯が花になる空想は

一生私から消えないだらう

これは言いようがないです。

小熊..これ仮題って書いてある部分ってどう表現した
のですか。

村上..いやあ、分かんないですね(笑)。無視してい
ますね、この二行だけです。なんか意味がある
のですか？

武田..でもやっぱりセクシーですよねこの詩。

村上..ああ、そうですね。

武田..花が電燈になるのじゃなくて、電燈が花になる
ってところに亀之助のセクシャルな感じがあり
ますよね。

男性..これ白百合なのは、どうしてですか？

村上..あまり、僕は好きではないのですが、いやらし
いほうなのですけど、そういう花にしたいな
と。

男性..純血とか。

村上..いや純血とかじゃなくて(笑)。

男性..百合は死の象徴でもありますがよね。

村上..ああそうですね、そういうのはちよつと分から
ないのですけれど。ただなんとなく、嫌な百合
の花にしてやろうと(笑)。

女性..香り、強そうですね。ヤマユリですよね。さ
っきのは肝臓みたいな百合ですよね。

村上..ああ、詳しいですね。

女性..百合が凄く臭ってきます、香ってきます。

『明るい夜』(詩集『色ガラスの街』より)

一人 一人がまつたく造花のようで
手は柔らかく ふくらんでゐて
しなやかに夜気が蒸れる

煙草と

あつのお茶と

これは――

カステーラのように

明るい夜だ

小熊..白いのは砂糖ですね。

村上..角砂糖です。

小熊..カステーラのような夜ってのはすごく惹かれる
言葉なんですけど。

村上..ああそうですね。

小熊..「ああそうなんだ」なんだ(笑)。

村上..僕はちよつとこなかったです、カステーラは。

小熊..へえ。

男性..やっぱり絵を描く人と詩を書く人じゃ、注目す
るところが違いますよね、ポイントがぜんぜ
ん。

村上..カステーラかあ。それはちよつと、なかった
けどなあ。

武田..言葉を使う人は、カステーラってここに使うの
だ、っていうそういう反応しちゃうのですよ
ね、きつとね。

男性..村上さんはあれですか、挿絵とか文章に絵を添
えるのが主で、絵そのものを最初からご自分で
発想されて描くというのは。

村上..それは別にやっています。

男性..難しさは違いますか。

村上..そうですね。去年、震災の年、一昨年になりま
すね。やはり、個展の予定組んでいました。九
月の予定でした。どうしましようかって、丸善
さんの方から言われて、うーんどうしようか、
学校のほうも大変な状態だったので、迷いまし
たが一応やりました。それは、完全に自分の世
界でやりました。なんだろう、フリーズに使っ
たのは、「青葉城恋歌が聞こえる日々」みたい
な。私の少年時代を含めて、高校っていうか、
青年の時代から感じているふるさとのイメージ
ですか。青葉城とか、広瀬通とか、あと、広瀬
川、太白山とか。私が少年時代に八木山に住ん
でいたもので、太白山がすぐ近いところでした。
それで、勝手にその世界を作りました。そ
のほか、夜、電燈を下げて勉強を教えてもら
った、そんな夜のシーンなんかでやりました。
そういう時は、完全に自分の世界です。言葉な
しです。それは、ぜんぜん形が・・・、小熊さん
はホームページ見られたから・・・あそこにあ
るのですけど。基本的にはそういう形です。今
日話しているものはもう完全に亀之助というこ
とです。

『ある来訪者の接待』（詩集『色ガラスの街』より）

どてどてとてたててたてたてた
たてとて

てれてれたとことごと

ららんぴびぴび

とつてんととのぶ

ん

んんん

てつれとぼんととぼれ

みみみ

ららら

らからからから

ごんごんごん

へろぺんとたるるて

これは完全にさっきの『雨雨』といっしょで。それの違うバージョンです。説明いらないうすね。よろしいですか。

『眼がみえない』（詩集『雨になる朝』より）

ま夜中よ

このま暗な部屋に眼をさましてゐて

蒲団の中で動かしてゐる足が私の何なのかがわ

からない

これは、さっきの夜がさみしいということと同じで

す。これは「夜が見えない」というイメージです。そして、ここでは「足」でした。感じたのは。布団の中で動かしている足。足か、何なのか・・・足です。それでこんな感じになりました。

亀之助さんの詩というのは、これ、二行しかないです。ああ三行か。僕、これキーワードは、「足」です。足だけで一枚の絵がイメージできるとするのが凄いな文章だと思えます。やはり凄いですね。前後の言葉が作らせてしまうのですからね。だからあれ？って思います。なんかいろんなものが、寝床で、きつと見えないのですけれど、布団で動いている足ってどうか、そこにいろんな人生が、足の動きがありますね。パーンと来たのが、布団の中で動かしている足です。何なのか分からないと本人も言っているのですけど。これは、だから、すつとききました。一応こう全体的な布団のイメージでデザイン化しているのです。あまりこういうのはリアルにやると駄目なので、抽象化しているのですけれども、これこそ絵だけみると、苦しいですよ。そこに文章が隣にあつたら。

小熊…トランプの模様にしたらかっこいいですよ。村上…それでこんな絵が生まれましたってことですよ。ね。

『雨ニ又レタ黄色』

花デハナイ。モミクチャノ紙デハナイカ、

景色ハ、ソノアスファルトノ路ノ上ノ黄色イモ

ノ二染マルコトモナク、イツサイガナントナ

ク澄ンデキル。

自分ハ、ソレヲナガク見テキタノカ、變ニ疲レ

タ氣持サヘシテ、ナンタ力服ノ中ノ體力寒ム

クナツタ。

ト、突然私ノ眼ニアフレテ一群ノ兵隊ガ通ル
ト、モウ黄色イモノハナク、燈ノ消エタヤウ
ニソコラガ白々シイ薄暮ノ雨ノ路トナツタ。

これを読んで、できたのがこれです。これはカラージュにしたのですけど、赤紙のコピーを貼ったのです。

これを読んだ時、彼の戦争に対する想い、まあ戦争反対だと思えますけど、そういう反戦、みたいなものの意識をちよつと感じたので。

『一本の桔梗を見る』

かはいそうな囚人が逃げた

一直線に逃げた

×

雨の中の細路のかたはら

草むらに一本だけ桔梗が咲いてゐる

村上…あの、逃げているおにいちゃん、金槌持っていますけどね、これちよつと。

小熊…で、警報が鳴っているのですか。

村上…そうですね。

『夜』（詩集『雨になる朝』より）

私は夜を暗い異様に大きな都会のやうなもので

はあるまいかと思つてゐる

そして

何処を探してももう夜には昼がない

村上…これはさつき、夜がさみしいという詩と似たような感じですよ。
もう夜には昼がないという表現が、なんか凄いな。夜には昼がない…。

『雨』（詩集『色ガラスの街』より）

四日も雨だ——
それでも松の葉はとんがり

四日も雨だとあります。まったく詩とは関係ないと思いますが、自分の心境を含めました。万年筆ですけども、仕事という世界をダブルさせた感じですよ。

小熊…万年筆が雨で濡れているからシミがあるっていうことですか。

村上…これ血なのですよ。

村上…まあ仕事です。これはちょっと暗いですかね。

小熊…「四日も雨だ」という表現は、ずっと雨だっていう陰鬱な気持ちになりますよね。自分を見つめてしまうような、そういうところで自分の仕事ってことですか。

村上…創作活動ということですよ。自分もそうだし、きっと彼もそうだし、詩をつくる、絵をつくる、その仕事のイメージがあったのですね。このとんがり。

小熊…とんがりですね、ペンでかく、筆でかくとか。村上…色々含めて仕事、ちょっと絵として無理があるかも、ですね。

これ。どうして最後にしたのでしよう（笑）。もうちょっと華やかなものを最後にしたらよかったのにも思います。ページ構成のミスですね。それで、最後に武田さんの文章がここにあります。最後のページに入れております。

小熊…ここから、「ふたりの雨展」に行くのですよね。村上…そうですね。あつ、それも話したほうがよろしいですか。

小熊…ああ、ぜひ、話してください。

村上…それで、これが終わった後ですけど、一度お会いしませんかっていうことで、武田さんに連絡して、それでちょっと飲みました。私は亀之助さんの作品で、「雨」という言葉に自分自身が入り込んでしまったので、そういう展覧会をやりたいなって思っていました。それで震災後の展覧会の時に、すでに雨をテーマにした、広瀬川という絵なのでですけど、広瀬川も雨が降っている、そういう絵とかをやっていました。そうして、武田さんと雨という共通のテーマで作品を作りませんかかっていうことで、面白いですねとあって、お互いに（事前に）合わせない絵にしようということ、武田さんには十二本の詩を書いてもらって、僕は十二枚の絵を描いて、会場のオープンの前日に持ち合わせてきて展示したということですよ。

全然打ち合わせなしにやりました。ただし、どうしてもダイレクトメールとかを作るので、一枚だけをお互い同じ考えでやったのはあります。しかし、その他はお互いに勝手に作ったのをぶつけるといふことをやりました。それは、小熊さんがこないだ見に来ていただいたものですが、ちょっと、そういうやり方はないと思いますが、危険性も十分ありましたが、すごく自然

な感じでしたよね？

武田…はい。

村上…凄く打ち合わせがあったようなふたりの展示会でした。でも、ぜんぜん、違います。

武田…搬入の日はすごい、緊張しました（笑）。果たしてどうなるのだろうか。

村上…ははは（笑）。

小熊…でも、あれは、二人で打ち合わせはしていたのだろうか、私はみていましたねえ。

村上…みなさん、そう言うんですね。だから、それもみんな尾形亀之助さんの仕事を僕がやり始めたからです。

それで今も次の個展をどうしようかすこし迷っているのですが、亀之助のパート2をやるのかなとも思っています。けども、まだ気持ちが決まらないのです。モノクロの世界でやるかとも思いますし。あと、これは時代に僕が寄り添って作った部分がありますが、そうじゃなくて今の時代の場面で、平成二五年の今、彼の詩を表現したらどうなるか。

ただ、ちょっとしんどいなって気持ちがあります。まだ踏み切っておりません。でも一回で終るのはもったいないなと思っています。だってぜんぜん、やりきれないです。

小熊…村上さん、本日はどうもありがとうございます。

村上…いえいえ。

（拍手）

小熊…最後に何か全体を通して、こういうことを聞きたいということがもしあれば、どなたか御発言をお願いします。

男性…えーと、悪戦苦闘したような話はずいぶん出て来たのですが、作っていて、ものすごい、

夢中になってしまった、あるいはたのしくて、たのしくて堪らない瞬間というのはどういう瞬間でしたか？

村上… やっぱり、終った瞬間ですね(笑)。

それはですね。私の作業自体は作った後に、作品にスプレー糊をつけて、厚紙にもう一度貼り直します。それで綺麗にトリミングして仕上げます。だから厚紙に貼ったときが最後だったのです。その時がすごい嬉しいのですね。

その時、僕、誰にも出来上がった作品を見せません。個展やったときも、個展の日まで見せません。ですから、作品はぜんぶ小さなケースに突っ込んでいくのですけれど、その入れるときもやはり楽しいです。だから、良い悪いは後で選別できるので、やっぱりうれいなっているのは、そういう時です。それと、分かるときがあるのです、「これ決まったな」というのが。滅多にはないのでですけど、決まったなというときですね。

実は、今やっているのは決まったのです。

今やっている河北新報の夕刊に連載している「愛蘭土のほろ酔いパブ紀行」という、私のイラストと文章で構成しているものです。イラストは切り絵でやっています。いま連載の九回目を作っているのですけれど、いままです全然だめで、それで今やっているのは、いいんですよ。これほんとうに、自分で(笑)。

人は笑うかもしれないですよ？でも本当にいい。言いましたね、うちの女房に、「今のいいねって」だから、そういう時が、たまにあるのです。

この連載の九回目ですけど、はじめて自分の思った作品ができました。老人夫婦がパブで飲んでいる姿の絵なのですけれど。だからそういう時があります。あと、大きい、雨のやつがありましたよね。これも自分でいいなと思いまし

た。あれは、文字を切り抜くのは面倒くさいのですけど、これは面白いって、自分で下書き作っている時にも思いました。だからそれを筐体の大きなこういうパソコンにスキャンして、外注ですけど専門家にお願ひしました。つくっているとき、本当に、なんか自分でいいなっているのですよね。そういう時は、人がどうのとか考えないのですよ。一応、個展で並べましたけど、半分売れましたけど、そういう時ってたまににあります。それと、気に入った奴って意外と評判が悪いですよ。ポストカードにしたり、個展の案内状にしたりね。そうすると、その作品が最後まで売れないで残ってしまいます。これ何でなのかわかりますか？自分がいいと思っているものが、だめなのは。褒められないのが多いですね、あと、ええー、こんなもの思っているのが褒められたりしますね。

※引用した尾形亀之助の詩は、思潮社刊現代詩文1005『尾形亀之助詩集』(一九八〇年十月一日第三刷)によります。

あとがき

村上様のお話には、尾形亀之助の詩が持つ魅力を語る上で、とても興味深い言葉や文脈が数多く出てきています。具体的なことは、お読みになられた方が、それぞれに感じていただければと思います。小熊がどうのこうのと最後に締めるようなことを書くのは、尾形亀之助の詩の理解の視野や可能性を狭くするものだと思います。また、「詩」というものが、どのように人に伝わるか、その一つの事象として貴重な記録ではないかと思っています。そして、何よりも一番は、村上様にとって、この講話録がながしか、今後の創作活動にとつて役に立っていただけることが、最大の喜びに

なるのかなと思っております。さらに、この講話掲載に当たっては、質疑の部分に詩人武田こうじさんのお名前を発言とともに掲載させていただきます。発表に快諾いただいたことを記すとともに、改めて感謝申し上げます。

この講話録を読んで、村上様のイラストを見たいと思われた方は、村上様が開設しているホームページ (<http://m-katsuniji.jimdo.com>) を見られるか、あるいは出版された本をお求めいただければと思います。本の注文は、メールアドレス oirakatsu-beer-chu-hi@geomone.jp 宛で購入可能です。お値段は、送料込みで二千五百円です。

最後に、今後の無意味な意味の尾形亀之助読書会の予定をお知らせいたします。第二十回は、三月二一日(土)午後三時から、福岡市在住の詩人尾形亀之助の研究者であります岩下祥子氏(北九州工業高等専門学校非常勤講師)をゲストにお迎えして開催したいと考えております。お話のテーマは、現在調整中ですが、未確定の上でおおよそのことを書かせていただければ、「尾形亀之助の未分化の詩性・・・八魚▽が「亜」に辿り着くまで」というものになるかと思っております。お時間のある方は、ご参加いただければと思います。

二〇一五年一月二四日発行

「発行及び連絡先」

郵便番号 九八九の〇一
宮城県柴田郡大河原町大谷字原前五十の五
携帯電話 〇九〇(五二三〇)五三九九
詩誌『回生』 小熊昭広
kaisei@poetic.jp
www.poetic.jp/kaisei/